

浜田市議会議長 様

議員名 沖 田 真 治

## 調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので報告します。

### 記

1. 視察先  
美星吉備高原神楽民俗伝承館 岡山県井原市美星町三山 5007
2. 視察事項  
備中神楽伝承と施設運営について
3. 視察の目的 (市政との関連など)  
本市における石見神楽伝承保存に関する検討の参考のため
4. 期間 (移動日を含む) 令和6年11月18日
5. 経費 14,628 円  
(経費内訳 交通費 高速道路利用料 浜田 IC → 笠岡 IC 4,880 円  
笠岡 IC → 尾道本線 1,080 円  
三次東 IC → 浜田 IC 2,840 円  
移動距離 往復 431 キロ 31.5L のガソリン代 5,828 円)
6. 視察のポイント・議員活動や市政への反映など  
伝承とは、人から人へ伝えて行くもの。人が多く集まる場所や、客席や舞台を設けた立派なハコモノが必ずしも必要ではないという認識ができた。神楽を持続していくためには観る側を喜ばす要素は必要であるが、神楽振興の要素の方向性を決めることは難しい。
7. 視察内容  
(詳細は別紙のとおり)



## 【視察の概要】

### 1、美星吉備高原神楽民俗伝承館

#### (1) 備中神楽について

備中地方を代表する民俗芸能として、全国的にもその名を知られている備中神楽は、生活にとけこみ、老若男女を問わず親しまれ、盛んに演じられてきたが、平成に入り熟練した神楽太夫の高齢化とともに、華やかさを競うイベント的な面が脚光を浴び、神楽に伴うしきたりや伝統芸能としての価値が見失われる傾向にあった。

美星町では、祖先から伝えられてきた神楽をできるだけ本来の姿に近い形で後世に伝えてゆくため、平成2年7月に中世夢が原の入口に「吉備高原神楽民俗伝承館」を整備。ここには、昭和初期の神楽面、陣羽織などの衣装をはじめ本格的な神殿（こうどの）を展示しており、備中地方の熟練した太夫で組織された「備中神楽五十鈴会」や次代を担う若手太夫による「民俗文化財備中神楽伝承研究会」の活動拠点として使われている。

#### (2) 施設について

##### ① 施設概要

運用開始 平成2年7月～

中世夢が原公園内の1施設として合併前の美星町がかんぽ財団と岡山県からの助成金を受け建設、運営を開始。平成17年3月に井原市と合併した後は、市からの指定管理を「中世夢が原管理協会」が引き継ぎ施設運営を行っている。

展示ホール：神楽衣装、神楽面、神楽幕の展示、備中神楽を見るモニター、展示台（ガラスケース）同ホールに天蓋と舞殿を設営。かつては幡織り機などの民具も展示していたが現在は展示されていない。

##### ② 利用状況

管理者 中世夢が原管理協会

管理料 中世夢が原公園の管理費として受託しているため伝承館単独の費用は計上されていない。伝承館には人員は配置していない。水道光熱費が主な支出で管理及び軽微な修繕は協会の職員が行っている。

来場者数は正確に把握していないが神楽公演を行ったときには大勢の観客が来る。土日は後継者育成を目的とし子どもに神楽を教えるために使用している。

##### ③ 施設のコンセプト

備中神楽の伝承と次世代の太夫の育成を行うことが目的。

備中神楽の変遷を伝えるための道具の展示を行うと当時に来場者へ説明、案内のできる人員を配置できればと思っているが観光施設として多くの来場者が訪れる訳ではないことから実現は難しい。週末は若い太夫（舞い手）や子ども神楽の練習場として活用している。施設建設の際に地元の宇佐八幡神社宮司であり民芸研究者である神崎宣武先生より「施設は次世代を担う若い人や子どもたちに本来の神楽を伝え残していくための施設にすべきであり、愛知県の花祭会館を参考にすれば良い」との助言を受け花祭会館をモデルに建設された。現在でもその意向に沿う形で主に研修施設として使われている。

### 三村信介園長への質疑応答

Q 施設は備中神楽振興に寄与しているか。

A 次世代の担い手の育成と言う意味では寄与している。

旧美星町時代は町役場の直営で観光部署が担当していたが大きく観光振興に繋がったとは言えないと思っている。

専門知識を持った職員が常駐していれば来場者が増えるのではとは思っているが実現することは難しい。

Q 備中神楽から見た石見神楽の印象は？

A 何れの地方に伝わる神楽は素晴らしいものだと思っている。石見神楽の場合は備中神楽と比べると芝居的な要素が多い印象を受けている。神楽を残していくためには観る側を喜ばす要素は必要であると思っている。観る人が居なくなれば、当然続いていかなくなるので一定のパフォーマンスは必要であるが「どこまでのパフォーマンスなら良いのか」は難しい。その折り合いをつけながら独自の発展を遂げてきた石見神楽の関係者の方々も苦勞されたと思っている。何れも自分が生まれ育った土地の神楽が一番であると思っている。

### ○ 所感

今年度、浜田市より石見神楽伝承方法についての検討がはじめられたことを受け「吉備高原神楽民俗伝承館」、「大元神楽伝承館」の2カ所を見て意見を伺った。2つの施設に共通している部分は神楽の伝承と言うコンセプトであり大勢の人が訪れる施設ではなく次世代の育成のための施設となっており、建設から30年近く経過、建設当初指導を受けた子どもたちが現在では指導する側となっていることから備中神楽の伝承という目的を果たしている施設と言える。

伝承とは、人から人へ伝えて行くものであり、人が多く集まる場所であるとか、客席や舞台を設けた立派なハコモノが必要である訳ではないと認識した。

今回、三村園長より伺った意見の中で、持続していくための「派手なパフォーマンス」の必要性について考えたとき、神楽振興とはどちらの要素を強めることを指すのか？この方向性を決めることは難しく、行政の考えをどう反映させるのか。観る側の意見はどこに反映されているのか。今後、検討委員会からの答申が出され「石見神楽伝承」について何らかの方針が示され、何らかの事業が提案されることが予想される。2カ所を視察し、見聞きした事例も踏まえ判断したいと考える。

# 状況写真

